

日本は今、欧米の金融危機による輸出急減が原因で、ひどい「経済危機」に陥っています。株価は下落し、中小企業においては、資金繰りに行き詰まる状態にあります。当然、経営に不安を覚える経営者も、少なくはないでしょう。

しかし、いかに未曾有の経済危機とはいえ、すべての企業が倒産するというものではありません。もともと経済は生き物であり、好・不況を繰り返すものなのです。そこで忘れてならないのが、今ある企業はどこも、様々な危機を乗り越えてきた過去があるということです。経営とは変化対応業とも言われます。社長を中心に、幹部社員から一般社員に至るまで一丸となって、これまでの経営環境の変化に対応してきたからこそ、今日があるわけです。

企業の危機は、経営環境の変化といった外圧によって生じるというより、内部のまとまりに欠けた結果、変化に対応できなくなつて起こると言われます。それだけに、経営者の誰もが、組織に緩みが出ないように気をつかっているものです。

しかしそれでも、経営が順調に伸びていたり、あるいは好況時には、社員の働く意識は緩慢になりがちになるようです。社長がこれを引き締めようと、いくら激をとばしても、なかなか思うようにはならないというのが実情です。

これが不況時になると、社員にも危機感が出てきて、不況克服のために、自らの働きに真剣に取り組むようになってくるものです。このときこそが、「課題を発見し、自分の能力を最大限に発揮してそれを解決し、



不況は成長のチャンス 逃げずに立ち向かおう

え・牧えみこ

また「苦難は幸福の門」との教えもあります。今回の不況に、経営者としての在り方を学び、社員とともに次の繁栄のステージに踏み込んでいきましょう。

（『松翁論語』）

「不況をこわがってはいけない。不況から逃げてはいけません。むしろこれに立ち向かい、社内のゆるみを引き締め、改善すべき点を徹底的に改善していくことが大事だ。不況のときこそ、身にしみてほんとうの勉強ができるいい機会だということである」

「不況をこわがってはいけない。不況から逃げてはいけません。むしろこれに立ち向かい、社内のゆるみを引き締め、改善すべき点を徹底的に改善していくことが大事だ。不況のときこそ、身にしみてほんとうの勉強ができるいい機会だということである」

「不況をこわがってはいけない。不況から逃げてはいけません。むしろこれに立ち向かい、社内のゆるみを引き締め、改善すべき点を徹底的に改善していくことが大事だ。不況のときこそ、身にしみてほんとうの勉強ができるいい機会だということである」

「不況をこわがってはいけない。不況から逃げてはいけません。むしろこれに立ち向かい、社内のゆるみを引き締め、改善すべき点を徹底的に改善していくことが大事だ。不況のときこそ、身にしみてほんとうの勉強ができるいい機会だということである」

「不況をこわがってはいけない。不況から逃げてはいけません。むしろこれに立ち向かい、社内のゆるみを引き締め、改善すべき点を徹底的に改善していくことが大事だ。不況のときこそ、身にしみてほんとうの勉強ができるいい機会だということである」